

# 京鹿子

京都府立総合資料館  
〒600-8585 京都府京都市中京区  
電話 075-741-1111

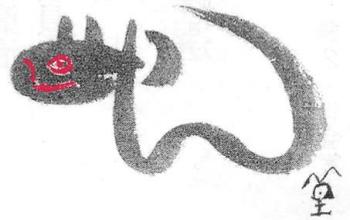
夏百日  
丸山佳子

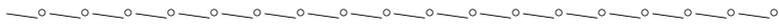
母の日はホテル時間の朝風呂に

一笑に付してはをれぬ黄砂拭く

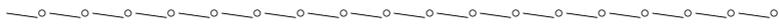
若葉風牛若丸の産湯碑に

芝桜犬づれ散歩おことはり





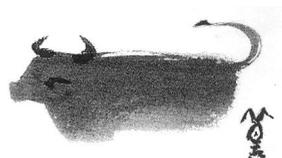
大抵のことは許さう雨季がくる  
薬より早寝早起き明易し  
あの時の写真しみじみ昭和の日  
朝顔とまた今日も相和して  
夏百日のさまざまに実印を  
仲のよい鳩を見てゐる梅雨の猫



豊田都峰

清響集 その一〇〇

日のかけら水に掬へば夏はじめ  
野に出でて夏川といふ巾を得る  
また合はせ得て夏川となりゆけり  
踊子草ときをり風は囃子方  
をどりこ草水のがみはあだめける  
田螺鳴くだあれも居ない村のひる



はじけ散る蜘蛛の子へ野末まで晴れ  
行々子比良を踏まへて底ぬけ晴れ  
なめくぢやふと累積を思ひけり  
のたうたぬさだめに這へるなめくぢり  
合歡咲けばさそはれごころまたふやす  
アイリスに風を発たせて喫茶どき  
あいさつに入山許され青葉風  
山門に入り涼風諸手受け

## 秀華採集

輸血するなら新緑の一滴を

山中 志津子

輸血という危機にこの大胆な発想、たいへん感心する。感動を与える作品には命にからむ場合が多いのは、われわれが生きているからである。

太陽に両手ひろげて水草生ふ

山田 慶子

新緑のガラスを抜けて少女くる

直江 裕子

前句のいっばいに葉を広げる姿は感動的である。後句の瑞々しさは中七の感覺的描写がもたらす。

鈴鹿 仁

青田どき

紫陽花のけふの彩もつ風あそび  
山蟻の住み住む浄土句碑は古り  
梅雨蝶の乱心のごと恋あそび  
十葉のひぐれいろして星を恋ふ  
床涼し一番星の 大宇宙  
石榴咲く脇役通す人の善さ  
遠き日のふるさと今や青田どき

近 詠

宇都宮滴水

汗の児

売家の札あたらしき百日紅  
汗の児のねだり上手や母若し  
九月尽野犬躐きくる余後の歩に  
初しぐれ墓地へのしるべ新しく  
いづこまで付き来る野犬秋彼岸  
香煙はいつもむらさき菊の華  
初しぐれ上手の掌を洩るうがひ水

# 神麓集



奴 新関 一杜  
 奴 風 に ふん ぼり 西東  
 からくりの手ぶりをかき夏祭  
 紅花の手拭かぶり茶摘み歌  
 ひとり者「京鹿子」句の団扇  
 読みあきた「奥の細道」昼寝しよう

氷 室 林 日 圓

濁りなき鏡氷をそだてる 労  
 天然のひむろつくる 智恵の人  
 仁徳帝初めて氷室 日本書紀  
 氷室とて国がさばくや延喜式  
 無尽蔵 賽の河原の夏落葉

松 田 都 青

戻りたき過去は桜が埋めつくす  
 脳の中落書ばかり四月馬鹿  
 車椅子押すに徹しぬ花の道  
 竹の秋洗ひ晒しの齡となり  
 我が影は死ぬまで伴侶春深し

光 蔭 荻野 千枝  
 まさか若しあるひはやはり落花霏々  
 悔悟めく卯の花腐し濡れ易き  
 光陰のいよいよ速し風光る  
 七変化ゆめもうつつもまなかひに  
 八十余度翠坂越え骨に罅

俳句王国 伊藤 希眸

坊ちやん電車街騒をのせ夏はじめ  
 外濠の仮橋渡る 巢立ち鳥  
 青蜥蜴先導にしてNHK  
 題は「藤」唇に集るカメラアイ  
 洋服の僧スタゾオに座し藤盆栽

奥村 鷹尾

裸形にて海に押し出す精霊舟  
 鈴虫のソコは広野に透く高音  
 残月の淡々と落つ流刑の地  
 阿波踊り鉦鼓眉山の丘に迄  
 箸にかかる粥食となり秋を病む

# 神麓集



田螺の火種 彌寝 瓶史  
 曰く付き羽根一枚の更衣  
 腸渌ひ止血ふつ日の皿苺  
 乱舞雀に敗走へびの目や如何に  
 軒雀へびに凱歌の金星あぐ  
 千枚田たにし火種まだ小粒

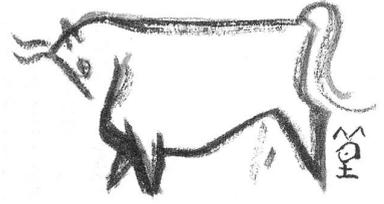
森津 三郎  
 春めきて石の童子のとのへる  
 百千鳥犬の首輪をあたらしく  
 犬ひるね嵩より小さくいびきて  
 駘蕩として船溜まり落花たむ  
 添喰は昔ながらに白い春

薄 暑 川崎光一郎  
 人生は不可解八十才の初夏  
 つはものの集へるやうに葱坊主  
 過疎の村夏鶯をほしいまま  
 五月晴波打際といふカーブ  
 白バイの不意に音出す薄暑かな

含紅抄 その十 沼田 巴字  
 田螺這ふいづこ坐しても日のぬくみ  
 新緑や生死もとより空の空  
 樟若葉なほ尽忠のこころざし  
 雲を恋ふ仏塔なれやチギタリス  
 香水や誘ひこごろのひそかなる

水 祀る 松本 鷹根  
 山藤の色に里総へ水祀る  
 橋赤し山霊飛花を導びきて  
 石楠花の艶研ぐ雨に法話聴く  
 春送る雨の師の句碑雨に訪ひ  
 松の芯ずんずん街を遠ざける

小堀 寛  
 青時雨盛つきりでやるコツプ酒  
 江戸城とつぶやいてある青夜かな  
 近松の女をとほす夏座敷  
 雷の子の帰りそびれる夢の中  
 仏法僧地球のいのち問ふらしき



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

京田 山中志津子

麻醉我を春番外の闇と成す  
輸血するなら新緑の一滴も

春灯し予後を確実かくじつに

揺れてゐて白の至情やゆきやなぎ

路の葉に寝ものがたりのやうな雨

しやぼん玉吹いておとぎの国の人

太陽に両手ひろげて水草生ふ

水草生ふ神輿が渡る向う岸

桜貝吾が少女期の瀬戸の風

妹の一筆添へて来る新茶

千葉 直江 裕子

花は葉に亀の泪を見てしまふ  
ポケットに海のアドレス揚雲雀

たんぼぼ・ぼひとつ離れて風になる

新緑のガラスを抜けて少女くる

たんぼぼの絮のまんなか三姉妹

アリゾナのお花見イエロー一色に

春日差し芝生の上のウエディング

夏めきて一人言やや大きめに

逃げ水やゆつくりと追ふメキシカン

砂熱しインディアン守る礼拝堂

アリゾナ 伊吹 之博